

新任職員自己紹介

相崎 守弘 センター長

新しくセンター長になりました相崎です。1976年から20年間、国立環境研究所で霞ヶ浦などの湖沼環境保全の研究に取り組み、その後島根大学の教授として生態工学を教えながら中海・宍道湖などの汽水湖の研究に携わってきました。3年前に定年退職し、土浦市に戻ってきました。今回、前田センター長がお辞めになるに当たり、考えてもいなかったセンター長を引き受けることになり、身の引き締まる思いです。専門は水質や生態工学といって、生物の力を活用した水質浄化に関する研究や生態系保全です。センターはパートナーをはじめとする多くの人に支えられ運営されています。これからも皆様と力を合わせ、霞ヶ浦などの湖沼やその流域の環境保全や改善に取り組んでいきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。



加藤 安章 副センター長

この度の定期異動で、参事兼副センター長兼総務課長に赴任いたしました加藤です。着任いたしまして、霞ヶ浦の持つ多様な姿と大きさを改めて知り、霞ヶ浦をはじめとする県内の湖沼、河川の水質環境などの環境問題に総合的に取り組む当施設の重要性を再認識したところです。

長野県の田舎で生まれ育ったこともあり、環境問題には日頃から関心を持っておりましたが、その中で考えていたのは、茨城県は経済的に恵まれた県ですが、人が多く住み、経済活動が盛んな地域では、自然環境はどうしても損なわれてしまうということ。当たり前のことですが、生活の利便性を享受しながら環境保全するためには、それなりの努力が必要ということでした。

副センター長といたしまして、微力ながら全力で取り組んで参りたいと考えておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。



岡崎 和也 係長

環境活動推進課勤務となりました岡崎です。恋瀬川を遡った有明中学校より参りました。霞ヶ浦について勉強をしながら、パートナーの皆様とともに環境学習を展開していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。



塩原 隆彦 主任

センター環境活動推進課の塩原と申します。センターのホームページやメールマガジン等の情報発信や環境学習フェスタを中心に担当することとなりました。環境事業やセンターのアピール等、情報発信を通じて皆様の活動を広く認知していただけるよう努めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



渋谷 一貴 主事

4月から新規採用で霞ヶ浦環境科学センター環境活動推進課に勤務することとなりました渋谷と申します。まだ至らぬところもありますが、パートナーの皆様のお力になれますよう日々努力して参りますので、よろしくお願いいたします。



福井 正人 囑託

パートナー魚グループと自然観察会の担当になりました福井です。微力ですが、パートナーの皆様と御一緒に、霞ヶ浦という素晴らしい水辺を将来世代に引継いでいけるよう、頑張りたいと思います。よろしく願いいたします。



竹村 篤 囑託

この4月から、環境活動推進課に勤務することになりました竹村です。湖上体験スクール、恋瀬川・小野川・巴川探検隊を担当することになりました。パートナーの皆様と一緒に環境活動を推進していきたいと思ひます。どうぞ、よろしく願ひします。



戸井 昌子 囑託

パートナー図書グループ、パートナー情報誌「香澄」編集部会、桜川探検隊を担当することになりました戸井です。微力ながらパートナー活動のお役に立てるよう努めてまいりたいと思ひます。どうぞよろしく願ひいたします。



千葉 文子 臨時職員

環境活動補助と水槽管理を担当する千葉です。霞ヶ浦のこれからが、今の自身の延長上にあることを、作業を通してひとつずつ確認していきたいと思ひます。皆様の後をついてまいりますのでどうぞ宜しく願ひいたします。



平成25年度パートナー活動に係わる担当者及び各グループリーダー等一覧

業務区分	業	パートナー		
	霞ヶ浦環境科学センター 担当職員	リーダー	副リーダー	登録人数
パートナー活動全体	山中係長、川田係長、松本主任 ※センターHP更新は塩原主任			67
パートナー企画部会	川田係長、山中係長、松本主任	会長:尾形孝彦	副会長:栗原知彦	13
「香澄」編集部会	戸井囑託、川田係長、渋谷主事	編集長:安川敏行	紙面編集:稲葉寛	9
研修G活動	長谷川主査、富田主査、岡崎係長	浅野明宏	杉山一平、渡邊昇	26
イベント・記録G活動	松本主任、川田係長、塩原主任	目次隆	山中章、平江俊之	33
生き物G(魚類)活動	福井囑託、長谷川主査、富田主査、岡崎係長	新関紀文	腰塚昭温、大須賀誠一	20
生き物G(植物)活動	福田囑託、長谷川主査、富田主査、岡崎係長	有吉潔	二階堂春恵、八島茂夫	22
図書G活動	戸井囑託、川田係長、渋谷主事	山中章	平江俊之、細谷浩	17
その他(鍵、ゴミ管理)	総務課・環境活動推進課職員			

平成25年度各グループ活動計画

企画部会

新年度に於ける「パートナー企画部会」活動計画について、ご紹介します。
パートナー企画部会は、平成21年5月、センターの事業補助という通常のパートナー活動以外に、センターの支援を得ながら研修・交流会や環境保全啓発活動についてパートナーが自主的に企画・運営していくために設置された組織体制です。

役割としては、パートナー活動全体に関わるプロジェクトを企画し、それに特化して運営します。(各グループによる自主企画活動は各グループの運営にゆだねます)

新年度の企画部会委員は、パートナーの皆さんに幅広くお願いし、委員として参加して頂いています。
(希望される方は、随時、センター環境活動推進課までお申し込み下さい。)

現在、パートナー13名・センター担当職員3名で構成されており、原則1回/月(毎月第1金曜日)開催しております。

企画内容は、「パートナーのスキル up」を主な目的とし、企画毎にプロジェクトを立ち上げ、年間計画として策定しています。

今年度もパートナー企画部委員とセンター担当職員のご協力を得ながら、「平成25年度パートナー企画部会プロジェクト計画」(別紙)に基づき活動を推進し、「楽しく・ためになる」をスローガンに委員一丸となって頑張ります。

具体的には、

- (1) 活動情報の発信 (2) 研修・交流の充実 (3) 霞ヶ浦流域の環境保全市民団体との交流を重点テーマとし、各テーマ毎にプロジェクトを立ち上げ実施して行きます。

重点テーマ	プロジェクト	プロジェクト概要
(1) 活動情報の発信	①「夏まつり」への出展 ②パートナー情報誌の発行	・パートナーブース でグループ活動の紹介とイベント ・情報誌「香澄」を発行(1回/2ヶ月)
(2) 研修・交流の充実	①「パートナー霞ヶ浦講座」 ②パートナー全体研修・交流会	・パートナーのスキルアップとして水環境についての座学・現地講座(4~5回/年)を開く ・パートナー活動報告及び環境保全市民団体の講演と交流
(3) 霞ヶ浦流域の環境保全市民団体との交流	①環境保全市民団体との交流会	・環境保全活動の現地見学と交流
(4) その他の活動	①普通救命講座 ②パートナー自主企画 「パートナー霞ヶ浦クリーンアップ活動」	・緊急時に備えての救命訓練 ・霞ヶ浦湖岸の清掃活動(1回/月)

自己啓発を兼ねて、パートナーの皆様のご参加をお待ちしております。

(企画部会：尾形)

研修グループ

本年度の研修グループパートナー活動は、従来からの研修室、霞ヶ浦出前講座における水質分析、プランクトン観察の講師補助業務の他に、選択肢としての**新環境学習プログラム「センター野外観察案内」の支援補助活動**が加わりました。また、センターイベントでの環境学習補助、自主企画活動としてデジタルパックテストによる「フィールドで水を覗いて感じよう Part 4！」の実施、**第10回身近な水環境の全国一斉調査へのパートナー有志による参加**も予定しております。

さらに、計画の進捗状況のフォロー及び反省を行いフィードバックするための定例会を年4回、研修補助活動について、その内容の理解及びスキルアップを図るための環境学習プログラムの勉強会を5月に計4回開催します。

重点活動

- ・研修室、霞ヶ浦出前講座での講師補助業務、並びにセンターイベントでの環境学習補助準備～実験（観察）～後片付けまでを一連の流れとして行う。
 - ・**センター野外観察案内の支援補助活動**
子供達6～7名を1グループとして、センター内の下記6ヶ所を案内、各所を5分～7分間で体験観察を行う支援補助活動です。
1、水辺（魚）の観察 2、植物プランクトンの観察 3、動物プランクトンの観察 4、霞ヶ浦の観察
5、野鳥の観察 6、植物の観察
 - ・定例会の開催
4月17日 10時～、7月23日 10時～、11月26日 10時～、平成26年2月25日10時～。
 - ・**新環境学習プログラム研修会の開催**
新環境学習プログラムの内容理解とスキルアップを図るため、第1回パートナー研修会を5月1日と5月3日に（受講はどちらか1日）、第2回パートナー研修会を5月15日と5月19日に（受講はどちらか1日）開催。
 - ・**パートナー新人受入教育**
新人受入教育の継続的な実施。
- その他
- ・自主企画活動として、デジタルパックテストによる「フィールドで水を覗いて感じよう Part 4！」の実施
霞ヶ浦流入河川のうち、流域類型ごとに新たに5河川（恋瀬川、園部川、花室川、小野川、鉾田川）と霞ヶ浦（センター下）の6調査点を選定、透視度など五感による調査とPH、デジタルパックテストによるCOD、リン、窒素調査などを年度内4回（5月、7月、10月、1月）実施。データ集積と季節変化による水質の変化、採水点付近の状況観察。
 - ・第10回身近な水環境の全国一斉調査への参加
6月2日実施される第10回身近な水環境の全国一斉調査に、センターパートナー有志として参加。
 - ・平成25年度の研修グループ登録者は26名（新登録者2名を含む）です。リーダーとして浅野、サブリーダーとして渡邊、杉山が指名されました。ご協力をよろしくお願い致します。（研修グループ：浅野）

イベント・記録グループ

本年度のイベント・記録グループの活動は、センター主催の「こども環境フェスティバル」「センター夏まつり」や、その他行事の補助活動と、次の自主活動を計画しております。

- 1) パートナー「いきいきフォト展」の開催・・・H25年12月予定
今回はセンター行事や 研修、魚、植物、図書、等で活躍しているパートナーの姿を写した、写真展を開催いたします。
- 2) 第2回川尻川探索・・・H25年6～7月予定
昨年源流を訪ねてを目標に探索を行いました、本年は川の両岸の植物調査を目標に計画しております。
- 3) 沖宿の昔を知ろう会開催・・・H25年6～7月予定
センターの所在地である、土浦市沖宿地区について、古文書を調べたり、地元の方からお話を聞いたりして、沖宿地区の昔を調べます。
(イベント・記録グループ：目次)

植物グループ

植物グループでのパートナー活動は、センター主催の「野外講座」に於ける運営補助作業と、“パートナーの自主的な学習行動”として毎月実施する湖岸での「植物定点観察」の環境学習推進活動です。

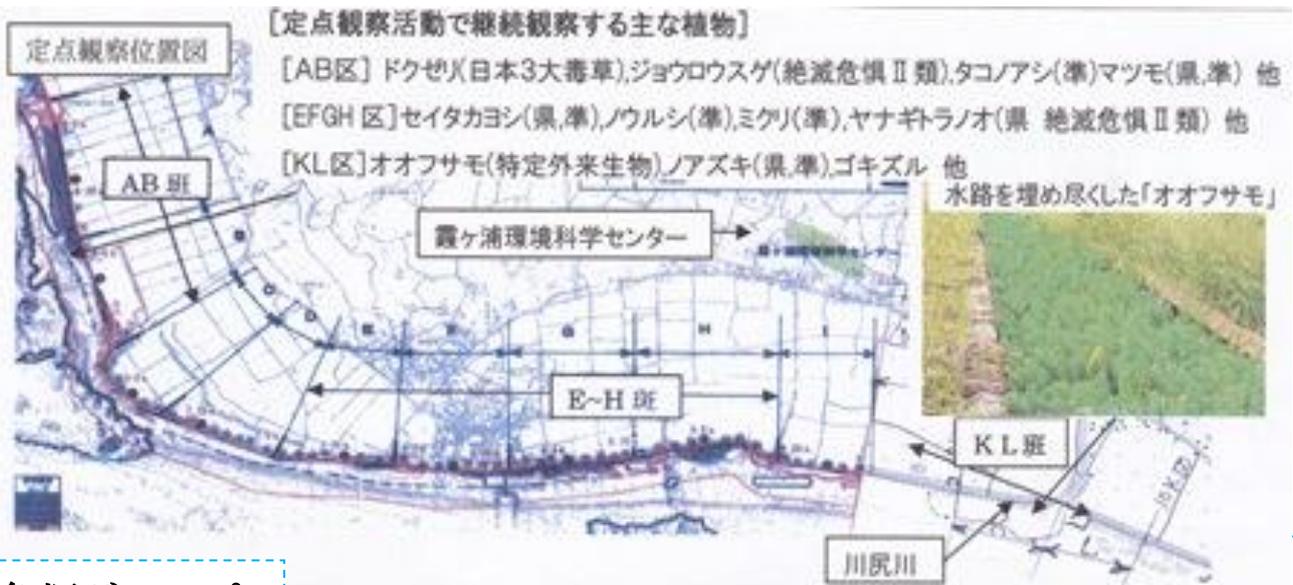
野外講座は霞ヶ浦流域内の植物観察を通して霞ヶ浦の水質浄化に関心を深めてもらう目的で、10回(4月～翌年1月までの毎月原則第2水曜日)実施されます。

定点観察活動はセンター直下の湖岸(下図)において、水質や気象の変動など環境の変化が植物相に及ぼす影響を見るため、毎月第4水曜日を定例日に絶滅危惧種や特定外来生物など継続調査を指定した植物は年間を通して、又花や実冬芽など特徴のある植物についても適時に観察・記録して、その生態写真に説明を付してセンター展示室に掲示します。



野外活動に於ける観察・解説活動

(植物グループ： 有吉)



魚類グループ

魚類グループでは今年度も例年と同様以下の活動を計画している。

1. 魚類定点調査・・・例年通り原則として毎週第2土曜日に実施し小雨決行とする。湖岸の計12の特定地点で投網調査により魚介類の分布や環境状況を把握する。作業は概ね4種からなり、投網による捕獲、同定、計数・計測(尾数、体長(最大と最小))、ならびに生息水域の水質検査(水温(気温も含める)、pH、透視度、電気伝導度)の各作業を分担する。既に数年分のデータの蓄積がありこれらの整理・検討を予定している。
2. 自然観察会・・・参加者の安全の確保、案内、用具の用意・運搬をはじめとして活動全般に渡る補助を行う(写真撮影などによる映像記録も含む)。
3. 展示水槽の掃除・・・毎週水曜日に1階、2階の展示水槽の水換え等の清掃作業を実施する。
4. センターの行事における業務・・・5月の環境フェスティバル、および8月の夏祭りにおいて魚類グループが担当する魚釣りゲームおよび投網教室における指導等に参画する。(魚類グループ; 新関)



図書グループ

本年度も昨年と同様の活動を継続していきます。メンバーは昨年と同じ総勢 17 名で、活動内容は下記の通りです。

- (1) 文献資料室の図書紹介(全員活動)
 - ・活動日は原則週 1 回で金曜日
 - ・文献資料室の図書を多くの利用者に知ってもらい、資料室の利用促進を図るためパートナー自ら図書を読み、図書紹介文を作成します。
 - ・図書紹介文の掲示について、誰にも目につきやすいように図書紹介パネル板を交流サロン内に設置します。
- (2) 霞ヶ浦Q&Aの作成(全員活動)
 - ・活動日は原則週 1 回で金曜日
 - ・昨年度活動してきました「霞ヶ浦や環境、郷土の歴史等」に関するQ&Aの作成を本年度は一区切りし、内容の精査・分類を行い、利用者に分かりやすい情報や資料を提供します。資料室の利用促進の一助になればと思います。
- (3) アクリルタワシ作成指導補助(全員活動)
 - ・活動日はセンターイベント及びアクリルタワシ教室開催時
 - ・アクリルタワシの材料の準備や作成の指導補助を行います。
- (4) 「テーマ別新聞切り抜き綴り」(スクラップ)の作成(希望者活動6名)
 - ・活動日は原則週 1 回で金曜日
 - ・引き続き 3 つのテーマ、「霞ヶ浦流域における河川・湖沼・ダムに関する情報」、「環境問題をテーマとした社説・論説等」、「常陽新聞“茨城の水源”シリーズ」に関してスクラップを行います。完成したものから順次配架します。
- (5) 読み聞かせ(希望者活動8名)
 - ・活動日は毎月第 3 土曜日(イベント開催時は除く)とセンターイベント開催時、開催についてはセンターホームページ等で広報します。
 - ・活動日の体制は原則 2 名としてローテーションを組みます。
 - ・読み聞かせ技術向上等のために子供たちの保護者を対象にアンケートの実施を計画しています。また、聞いてくれたお客さんに手作りのシオリをプレゼントすることを考えています。

(図書グループ：平江)

「私の細道」(その 5)

室の八嶋

古来、和歌に詠まれた名所を歌枕という。「奥の細道」は歌枕の旅であるとも云われている。それ程、芭蕉は歌枕の地を縫うように旅を続けている。その最初に訪れた地が「室の八嶋」である。栃木市惣社町大神神社の林の中にある。

早春の朝、小雨の残る中、私は惣社に着いた。家並みと畑の混在する外れに森があり、これが大神神社である。大神は「おおみわ」と読む。祭神は、大国主神であり、配神として、木花之開耶姫他が祭られている。

本殿拝殿などの神域から外れたところにちょっとした池がある。池の中には八つの島が作られ、それぞれの島に、浅間・筑波・鹿島・香取・雷・熊野・二荒の各神社と天満宮のいずれも小さな祠が配されている。惣社(総社)とは、各地の神社の巡拝の労を省く為に、分社を集めたもので全国にあるが、ここでは、町名として残っている。

私が訪れた 2 月 4 日は月曜日であった為か、境内には誰一人居らず、杉の木立に囲まれ静寂の中にあった。杉の木は既に褐色の花粉に包まれていた。池の入口には紅い鳥居があり、小島は紅い橋によって繋がれていた。明らかにそれらしく作られたものであり、歌趣を感じさせるには程遠いものであった。

古来、歌枕の地として多くの歌人に感銘を与えた頃は、この地方が湿地帯であった為、水煙の立ち込める趣き深い地であったらしい。しかし、芭蕉が訪れた時期には、既に湿地は枯れて、往時の面影は無かったようである。芭蕉の訪れた元禄2年から25年後に刊行された貝原益軒著の「日光名勝記」に「室の八嶋」についての記載がある。その描写によると、「林の内に惣社大明神あり。是、下野の惣社なり。その社の前に室のやしま有。小嶋のごとくなるもの八あり。そのまハリハひろくして池のごとし。今ハ水なし。～ 其村の人あまたに問しに、今ハ水なきゆへ、烟もなしといへり。」とある。当時、池に水こそなければ、現在の大神神社の形そのままである。



大神神社

「奥の細道」は「歌枕」を訪ねる旅である。折角、最初の歌枕の地「室の八嶋」を参詣したというのに、芭蕉はこの項で「室の八嶋」の印象の欠片も記していない。芭蕉はこの地を訪れて失望したのであろうか。この章段では「室の八嶋に詣す」と記載するのみである。同行曾良を登場させ、この地の故事来歴を語らせている。曾良については、後に「黒髪山」の章段で紹介されるが、吉川惟足に師事し、神道に詳しい。後に、旗本の用人や九州巡見使の随員にもなっている。



室の八嶋

曾良の語る「室の八嶋」の由来は、以下のふたつの物語による。そのひとつは古事記の中の故事である。懐妊した「木花之開耶姫」が貞操疑惑されたことに怒り、「無戸室」に籠って火を放ち出産した場所と云ういわれから「室の八嶋」という名が付いた。昔、宮中大炊寮では「かまど」を「やしま」と云ったようである。「かまどを塗り込めた室」の意であり、「やしま」の音からやがて「八嶋」へと変じたらしい。いまひとつは、娘の死を偽装して、代わりに魚を焼いたと云う「このしろ」伝説も「八嶋」の由来として、さらっと触れている。

これらの故事に関連し、当時の水煙のただよう趣きと相俟って「室の八嶋」は煙（水煙）の名所となり、平安時代には良く歌に詠まれた。前記の通り、芭蕉の時代には古の水煙に包まれた地では無くなっていた。

芭蕉は「奥の細道」の「室の八嶋」の章段では句は掲載していない。しかし、実際は当地で故事に習って句詠しており、曾良の「俳諧書留」に残されている。

糸遊の結つきたる煙哉 翁

「糸遊」とは「陽炎」のことであり、春の季語である。現在、池の中の小島への入口にこの句の掘られた句碑がある。

(パートナー:小松)

デジタルカメラ（その9）フラッシュはなるべく使わない

暗い室内などで、よくフラッシュを使って撮影している方を目にします。特にオートにすると自動的にフラッシュが作動して、そのまま撮影している方が大半だと思います。しかし、上手な人は内臓フラッシュをあまり使いません。内臓フラッシュは光が弱いので、自然な色が損なわれてしまいます。

ここではなるべくフラッシュを使わない撮影方法をご案内します。

○フラッシュを使うと自然な質感が損なわれる

室内での撮影や、暗い場所での撮影ではフラッシュは必要不可欠だと思っている方が大半だと思います。

しかし、フラッシュは強制的に光を放つため、全体的に光ってしまったり、不自然な影が出来てしまったりと、実際自分の目で見たものと写真の出来栄えのギャップの違いが大きくなりがちです。

○ここで考えてみるのが「なぜフラッシュが必要なのか？」です。

カメラというのはわずかな光があれば、シャッターを開ける時間を長くすれば撮影することができます。

しかし、手ぶれになってしまったり、被写体が動いてブレたりしてしまいますよね。それを防ぐために強制的に強い光を放って、速いシャッター速度で撮影できるようにフラッシュが使われるわけです。

ですから逆に考えると、「シャッター速度を速くする工夫」をすれば、フラッシュをつかわなくてもいいわけですね。

○速いシャッター速度を保つには

フラッシュなしで手ぶれを防ぐ方法は、シャッター速度を上げるのが一番です。一般的に標準レンズであれば、50分の1秒よりシャッター速度が速ければ手ぶれが少ないと言われます。

シャッター速度を上げる方法で、一番手っ取り早いのは **ISO 感度を上げる** ことです。「ISO 感度を上げると画質が落ちる」と、一般的に言われていますが、最近の一眼レフは性能が上がり、ISO 感度をちょっと上げたくらいでは画質の違いはほとんどわかりません。拡大して見てみれば・・・そうかも・・・と思うようなレベルです。

○じっくり高画質で撮影するなら三脚を使う

時間と余裕があれば、ISO 感度を下げて三脚を使って撮影するのが望ましいですね。

○フラッシュの使い道は

今まで散々否定してきたフラッシュですが、暗い屋外での人物写真などは、やはりフラッシュがないと撮影は難しいですね。また、明るい屋外でも逆光となってしまう、人物の顔が暗くなってしまうときなどにはフラッシュが必要となってきます。

(パートナー：目次)

[パートナー情報紙 香澄]原稿募集

香澄編集部では[香澄]に掲載する原稿を募集しています。内容は問いません。センターでの活動内容や、趣味などなんでも結構です。原稿はパートナー室のメールボックスに入れていただくか、編集委員に直接お渡しいただいても結構です。

(パートナー情報誌[香澄]編集部会)